平成２６年度　第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会

平成２６年１０月２１日（火）

【鉄矢会長】　　平成２６年度第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開催したいと思います。

では、次第にしたがって進めたいと思います。次第の１番で、「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館所蔵作品による猪熊弦一郎展」の実施報告をお願いします。

【荒木学芸員】　　資料１、２にも猪熊弦一郎展について掲載しておりますが、特に今回猪熊展に関しては、大きな成果があったということで、資料３のほうにデータを出しておりますので、そちらをごらんください。

前回の運営協議会のときには、まだ猪熊弦一郎展が始まって間もなくだったのですが、９月７日に終了しまして、最終的には入場者数が４,３５４人という、当館開館以来の最高記録になりました。特に注目されるのが、資料の２番にありますように、有料入場者数の率が８０％近くになっている、これは非常に高い数字だと思います。また、アンケートなどを見ても、当館に初めて来たという回答が非常に高いということで、猪熊展のＰＲ、広報が多くの人に届いて、はけの森美術館に向かうきっかけになったということがわかります。

次のページを見ますと、アンケートの結果が出ています。詳しくはお読みいただくこととしまして、分析のところだけですけれども、「大変満足」と「満足」が９４.６％、９５％近くになりました。アンケートの回答は、入場者数が４,３５４人に対してアンケートが１,０５３枚返ってきました。非常に高い回収率で、中にはわざわざ郵送で後から送ってくださった方もいらっしゃいました。

この形式のアンケートは、昨年度の佐藤慶次郎展で行ったアンケートとほぼ同じ設問だったのですが、それと比べましても、やはり通常の所蔵作品展と見比べると３０代以下、３０代から４０代の割合が非常に高くなっていまして、企画展ならではの層が来ているというところがあったと思いました。

それから、７１.５％が初めて来館したお客様でした。そのきっかけについても非常にさまざま出て、一応回答としては「口コミ」というのが一番多かったんですけれども、これが本当に現実の、リアルの口コミなのか、あるいはＳＮＳなどネット口コミなのか、そこ

まで判然としなかったのは残念だったんですけれども、口コミですごく広まったということです。

それから、この展覧会では雑誌やウェブサイトへの広告も出したんですけれども、その広告、あるいは武蔵小金井の駅へのポスター、これらについてもアンケートに着実に反映されていました。「駅のポスターを見ました」、あるいは「ウェブサイトを見た」という回答も多くみられました。以上が概要について。各アンケートのコメントについてはこの資料の続きに載っております。

ちょっと資料が前後しますけれど、資料１に、関連事業についての概要と参加者数等を掲載しております。猪熊弦一郎展では、イベントを非常に数多く開催しました。まず最初には、いつも「おはなしのへや」で協力いただいている、「こごうちぶんこ」に講師となってもらって、絵本の読み聞かせと、ミニ絵本づくりのワークショップを組み合わせたイベントを開催しました。こちらは対象が５歳児から小学生ということにしたところ、早々に定員に近づきまして、抽選になるかどうかぎりぎりのところの申し込みがありました。写真にありますように、最初には猪熊弦一郎の作品を使った絵本、あるいは、猪熊弦一郎が、わりと初期のころに児童文学誌、絵本雑誌などに挿絵を描いていたので、そうしたものも少し紹介し、その後で、テーマとなった絵本が谷川俊太郎さんの「いのくまさん」という絵本で、そこに出ている「いのくまさんはねこがすき」「いのくまさんはとりがすき」といったフレーズを使用して、自分の「何々が好き」という絵本をつくろうというワークショップでした。

続いて、この後、トーク＆ワーク「みて・つくってイノクマ体験！」。こちらについては、展覧会で作品を鑑賞した後に猪熊の「対話彫刻」といういろいろな針金やお菓子の包み紙などを使ったオブジェをつくるという、作品鑑賞と工作を組み合わせたイベントです。参加者との対話型の作品鑑賞と、工作を組み合わせたワークショップについて、非常に経験の多いエデュケーターの齊藤さんを講師に招いてのイベントでした。午前を小学生対象、午後を中学生以上としたのですが、どちらも大変熱心に、特に工作には夢中になっていました。小学生は最初はちょっと、ギャラリートークで、いろいろ質問を投げかけられても少しもじもじしたりしていたんですけれども、途中からはと意見を言うようになって、子供たち同士も少し仲よくなってきたところで工作に入るという形でプログラムが進みました。大人もほぼ同様のプログラムになりましたが、作品やトークの内容はもちろん変えて、作品をじっくり鑑賞するということに重点を置きながらやったんですけれども、実際、工

作に入ると、むしろ子供以上に自由な発想で、大分熱心に材料を選びながら工作をしていました。

そのほか、猪熊展のイベントとしては、作品を所蔵している丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の学芸員で、この巡回展のアドバイザーである松村さんにギャラリートークをしていただきました。１階から２階、全ての会場を一通り回るというスタイルでした。お客様は少し離れたり、また参加したりという様子が見られたのですが、参加者数３１人とありますが、うち２６、７人ぐらいは最初から最後までずっと参加していました。

資料１のページをめくりまして、こちらはちょっと写真がないんですけれども、「猪熊作品を模写！スケッチ曜日」。当館で例年、主に夏の所蔵作品展で行っていた模写のイベントを猪熊展でも開催しました。人数はその日によってまちまちでしたが、お客様の声として、参加された以外の方でも、「展示室でこういったスケッチをしているところを初めて見た」とか、ほかのお客様がスケッチをしているところを見て、「私もやりたい」と言って参加された方などいらっしゃいました。アンケートでも、「こうした試みはすばらしいです」という意見がありました。今までの所蔵作品展の開催ではちょっと人数が少なくてなかなか反応が聞けなかったのが、ここで聞くことができて、また今後も所蔵作品展などにおいて継続したい企画だと思いました。

当館の中での猪熊展のイベントは以上なのですが、一つ番外といいますか、資料の２ページの下のほう、［参考］外部との協力イベント、あるいは、写真資料でも１枚目の一番下のほうに写真を出していますが、荻窪に「６次元」というブックカフェがありまして、ノーベル文学賞の発表のときにハルキストが集まるブックカフェとしてテレビでも中継されるところなんですけれども以前からいろいろな展覧会や美術館にちなんだイベントを開催していまして、そこでたまたまご縁があって、ぜひ猪熊展でもイベントをやりましょうという話になりました。その中で、どういったことができるだろうと考えていたところ、たまたま中村がふっと思いついて言った、対話彫刻カフェとか、対話彫刻バーという一言が「６次元」のオーナーさんにも非常に響いて実現しました。館内では子供向け、中学生以上向けの内容を、今度ははじめから大人向けのイベントとして開催しました。

人数は１６人と非常に少なかったんですけれども、ただ、この「６次元」の持ついわゆるインターネット、フェイスブック、ツイッターなどでの発信力によって、例えば「６次元」の「猪熊展にちなんだ対話彫刻 BAR をやります」という告知が出た途端に、ツイッターでいえば、１００近くのリツイートですとか、あるいはフェイスブックの「いいね！」

があって、実際に来た以上に、猪熊弦一郎や展覧会に興味を引かれた人というのは、それなりの数になったということがわかりました。

イベント自体はほんとうに小ぢんまりと、みんなでわいわいと、一応「Bar」と銘打って、ドリンク付きということになったんですけど、ほとんどみんな飲食をせずに工作に夢中になっていました。最初のほうではもちろん、この展覧会についての紹介と宣伝をしたのですけれども、そこでも、もう既に展覧会をごらんになったという方もいらっしゃいました。そしてまた、まだ見ていないという方も、「ぜひ行きたい」、「友達と行きたい」というような反応もありました。初めて外部の場所での出張イベントだったのですが、もし機会があったらまたこういった外部との共催等々のイベントは試みできたらなと思いました。

猪熊展については、以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございました。ご質問、ご意見等ありましたら。

【山村委員】　ちょっと質問ですけど。資料１の２ページの、一番上の４番の「猪熊作品を模写！スケッチ曜日」なのですが、これは何曜日ですか。

【荒木学芸員】　これは毎週火曜日になっていました。

【山村委員】　火曜日の、１０時開館から４時までということで。

【荒木学芸員】　５時までやっていってもいいですけれども、受け付けは４時までということにしていました。

【山村委員】　これは特に、普通の来館者と交錯してクレームがあったとか、そういうことはないんですか。

【荒木学芸員】　それはありませんでした。もともと、以前から、所蔵作品展でやっていたときからも、大体、オーブン・ミトンカフェ、喫茶棟が休みであるということで、少し人が落ちつくだろうというところで火曜日に設定することが多かったんですけど、大丈夫でした。また、定員を「同時に５名まで」と制限していたのですが、最後の８月２６日以外は大体、同時には２、３人程度におさまっていたので、特に問題ありませんでした。

【山村委員】　そうですか。はい。わかりました。

【鉄矢会長】　ほかにございますか。

【村澤委員】　感想なんですけど、開館していた期間が４０何日かですかね。営業日数にすると。

【荒木学芸員】　４４日間です。

【村澤委員】　だから、１日当たり１００人くらいというのは、非常にすばらしいとい

うか、最高ということでお話がありましたけれども、皆さんの成果ということでうれしく思います。

アンケートに書いてあったところで、なるほどなというか、ごもっともというか、今までも思っていたことなんですけど、やはり宣伝の効果は、結構大きいと思いますので、今後もやはり広報活動に力を入れていただければと思います。あと、「作品のモデルになった石がその展示物と離れていた」ということがあったんですけど、どういう経緯かわからないのですが、その辺のところをやっぱり合わせたほうがいいのかなというふうにも、そのときは全然思わなかったんですけど、アンケートを見て思います。

あと、字が小さいということがあったんですけど、私もそう思っていたのですが。ほかの美術館もやはり小さい字で書かれているんですけど、もうちょっと大きくてもいいかなとは思いました。

以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

【上田委員】　私も、感想に近いことなのですが、アンケート、「来館者の声」のところで、「案内図がもっと欲しい、バスの停留所からここまでが意外とわかりにくい」というのがあって、それはほんとうに人を呼ぶためにはちょっと不利なところだなと日ごろ感じているところで、やっぱりそう思うのかなというのを痛感というか、ああ、そうなんだなと思いました。あと、こちらはプラスのほうなのですが、資料３の２ページ目の下のほうにある、「規模が小さくてとても見やすい」ということなのですが、これはとっても、美術館として規模が小さいことってマイナス面もあるとは思うのですが、このはけの森美術館の特徴を生かすすごくいいところだと思っていて、「展示の内容が少ない点数ながら非常によい」というのはすごく、準備してくださる方の努力というか、もう珠玉のものを選んで展示してくれているということに尽きると思うんですけど、この規模が小さくてよいというのをすごく生かしていけたらなと、すごく思います。

以上です。

【鉄矢会長】　私もちょっと意見なんですけれども、多分これ、非常にわかりやすい作品が並んでいたことと、あと、学校の先生たちが非常に好みのタイプの作品が並んだというのは強いんだと思うんですね。子供たちに「行ってごらんよ」とか、子供たちが口コミで広げるとか、ツイッターとかもあるんですけれども、やっぱりわかりやすさと持っている力強さがあったのかなと。あと、子供が見に来るというイベントのときに、ここを先生

もわくわく見ていたような気がするんですね。そういうのは、この作品展のメリットだったんじゃないかなと。図工の先生たちに何回か会ったときにもそういうのを聞くので。そのほかのときには、はけの森のときに行った感想は、僕は図工の先生に会ったときに聞かなかったので。同じようには行っているわけですよね。行っているけど、この猪熊のときはすごく耳にしたのでそう思いました。

では、次第の２、そのまま引き続き、お願いいたします。

【中村学芸員】　　続きまして、資料１の２ページ目と、写真資料の２枚目をごらんください。猪熊展開催中に行った教育普及事業についてご説明したいと思います。

まず最初に「おはなしのへや」、「夏のおもいで～花火を描こう～」というイベントを８月２１日に開催いたしました。こちらは、定期的に行っている「こごうちぶんこ　ことりのへや」の協力による読み聞かせのイベントなのですが、今回、夏休みということで、黒い大きな画用紙で、大きく花火を描こうというイベントを行いました。写真を見ていただいてわかるように、花火をモチーフにした絵本などの読み聞かせをしてもらって、その後に、自分たちも思い思いの花火を描いていくという感じだったのですが、実際、ただペンで描くだけではなくて、マスキングテープを貼ったりとか、布のようなものを貼ったりとか、ビーズを貼ったりとか、美術館にある材料をフルに生かして子供たちが造形を楽しんでいました。

今回、この猪熊展開催中ということもあって、参加者数が４０名ということで、親子含めての人数なのですが、今までの「おはなしのへや」で多分一番多く参加があったということと、結構遠くから来た方が多くて、市内だけではなくて、区から来ましたという方もいました。ただ、すごくいろいろな方に来てもらってありがたかったのですけれども、ちょうどオーブン・ミトンカフェがお休みの時期で、お昼を食べずに来てしまって、「お昼を食べるところ、ありませんか」という方もいらっしゃったので、そういったアナウンスを、こちらは事前の受け付けではないので、例えばチラシに書くとかできればもっと周知できたのかなというふうに、反省点としてあります。

あと、この日は武蔵野市の図工の先生方も見学に来てくれました。

次に、鑑賞教室ということで、これも毎年行っている、市内の４年生が展覧会に鑑賞に来るというものです。今回会期が、夏休みと重なっていたので、夏休み明けが１週間しかなくて、それで３校のみ、企画展を観覧するという形だったのですが、写真をごらんになっていただくとわかると思うんですけれども、さっき鉄矢先生が言ったとおりに、やはり

事前に先生方も今回、先生方好みの作品だったということで、こういうものがあるんだよとか、事前授業に結構力を入れてくれていて、子供たちも実際に「あ、本物だ」と前のめりで見てくれていたなというのは、生徒の感触として感じました。

報告に関しては以上です。

【鉄矢会長】　はい。ありがとうございます。ちょっと戻って、質問なんですけど、先ほどの「対話彫刻 Bar」の協力というのは、結局どんなことを、どんな協力という位置づけなのですか。こちらの美術館としての協力という位置づけは、どんなふうに対応したのか。

【荒木学芸員】　一応、「６次元」の主催のイベントなんですけれども、こちらはアイデアと講師というか、紹介する人と、あと、少しだけの材料を持って行ったという形ですね。実際、お金は何も、全くかかりませんので。

【鉄矢会長】　かかっていないの。

【荒木学芸員】　全部、自分たちの準備できるもので行いました。

【鉄矢会長】　いいことなんだろうなと思っている。ポジティブならいいんですけれども、多分、学芸員の労働時間外の労働になっているわけですよね。

【荒木学芸員】　労働となると、そうなりますね。

【鉄矢会長】　ですよね。だけど、こういうふうに、やりたいからやっているという感じもあっていいなと思っていて、いい広がりになるといいなと思っています。そういう堅い意味で、協力って何ですかと言っているんじゃなくて、そういう自由な中でも広げていきたいという作品展だったり、そこに興味を持ってくれる人たちとの交流があるというのはすごくいいことだなと思って、評価のつもりでちょっと質問しました。波紋のように、波及していく感じが、うまくできればいいし。ただ、これが持続可能になるのか、それを「うちにはやってくれなかったの？」という話になるとまた大変だろうなとは思っています。

【上田委員】　これって、つまり、学芸員のどなたかの方が、この「６次元」の方とお知り合い、個人的にお友達だったりして、「やろう、やろう」という盛り上がりの中で展開したイベントということなのでしょうか。

【荒木学芸員】　そうですね。猪熊展に来てくれた美術関係の知人が、その「６次元」のオーナーの方をご存知で、多分興味を持つと思いますよということで紹介してくれて、猪熊展をきっかけにして広がったつながりです。

【上田委員】　　ということは、メンバーというか、学芸員の方がかわってしまったら、もう切れてしまうというか、また別の波紋になっていくというか、何といえばいいんでしょう。

【荒木学芸員】　　常にこの美術館にある課題です。

【上田委員】　　そういうことですよね。

【荒木学芸員】　　例えば、はけのおいしい朝市の方々とのつながりは、前の学芸員から始まったものですけど、今も続いていますので、引き継ぎがうまくいけばいいんじゃないのかなと思います。

【鉄矢会長】　　学芸員の展覧会の広報活動の一環のような感じなんじゃないかなと思っています。

よろしければ、次、今後開催予定の展覧会・ワークショップ等という、資料１の３ページ目からですね。

【中村学芸員】　　チラシもお渡ししたと思うのですが、今月２５日土曜日から所蔵作品展「中村研一　入門と応用」がスタートします。今回、チラシを見ていただいてもわかるように、入門編、応用編、あと、応用編の特集も、特集１、特集２というふうに分かれているので、扉を開くような形のデザインになっていて、左右でその特集の水彩画を配置したりしているようなチラシになっています。そのチラシのとおりに、第Ⅰ期、第Ⅱ期と展示替えがありまして、第Ⅰ期は私が担当して、第Ⅱ期は荒木が担当します。

今回、展示替えがあるというのと、関連事業で、Ⅰ期開催中に来た方に、リピーター特典がある「また来てね！カード」というカードを配布いたします。しおりサイズのカードでして、しおりとしても使うことができますし、Ⅱ期、また来ていただいた方が受付にそれを提示すると、特製グッズをプレゼントするという形で、１回だけではなくてⅠ期、Ⅱ期どちらも見ていただいた上で、中村研一を知っていただけたらというような試みです。

あと、関連事業としましては、こちらの定例的に行っている「おはなしのへや」を、前期、後期、１回ずつ行います。また、ギャラリートークも特集がⅠ、Ⅱ、それぞれありますので、前期、後期と１回ずつ行います。

あと、もう一つ、最後、創作ワークショップなのですが、ちょっとこちらのほうはまだ詳細が決まっていないのですが、小特集に関連した内容で創作ワークショップを行う予定でいます。

展覧会に関しては以上です。

続きまして、４ページ目。企画展ですが、こちらの所蔵作品展が終わった後、年度末、３月２８日から行う企画展で、こちらに関しては前回、荒木から説明があったとおり、小金井市に住んでいた作家の二人展ということで、現在、準備をしております。

（２）の教育普及事業ということで、鑑賞教室です。先ほど、企画展に３校来たと報告しましたが、春の所蔵作品展に２校来まして、残りの４校が所蔵作品展の開催期間中に訪問します。やっぱり先生方としては企画展を見せたいという方も多いのですが、ちょっとそういう思いにも負けないように、中村研一もこんなにおもしろいことをしていた人なんだよというのが伝わるようなきっかけになればいいなと思っています。

最後に、教育普及事業の②なのですが、市内の中学生が職場体験に訪れます。今年は、美術館の近くの二中と、あと、緑中と南中の３校がそれぞれ３日間訪問するのですが、今日、二中の子が事前訪問ということで来てくれて、女子１名、男子２名の２年生の子たちが体験することになりましたので、こういった活動も通して、この美術館がどういうところか、中村研一がどういう人かというのを伝えていければいいなと思っております。

予定に関しては、以上です。

【鉄矢会長】　何かご質問ありますでしょうか。

【村澤委員】　リピーター特典「また来てね！カード」をつけていただきましてありがとうございます。ぜひ人数の統計をとっていただいて、どのくらい成果があったか、後で教えていただければと思います。あと、ちょっと、もしかしたら、忘れてきちゃったか、そういう方がいるかもしれないですけど、まあ、そういうところはちょっと臨機応変にご対応いただければと思います。

【中村学芸員】　はい。

【上田委員】　ちなみに、特製グッズというのは何ですか。

【中村学芸員】　今、製作中です。もらってうれしいものを考えてはいるんですけれども、種類を多目にして、できれば若い世代が喜ぶものとか、年配の方が喜ぶものとか、幅広く喜ばれるようなものを考えられたらいいなと今、アイデアを出しているところです。

【上田委員】　楽しみです。

【鉄矢会長】　私からなんですけれども、この特集Ⅱの、「もとは同じスケッチブックにとじられていたのでは？と推測されるグループが幾つかあります」って、ここですごく学芸員の顔が見えて楽しいんですよ。ここで、どういう調査をしたのかとか、紙の透けているものが「あ、同じものだ」とかやって、学芸員の仕事ってこういうことなんだというの

が見えたりすると、「あ、だからなんだ」と。それから、旅の日記と、何かこう見ているのと、絵がこれなんじゃないかとか、日数がこれなんだけど、実は同じとじられているけど、同じ時期には違うもの、スケッチブックもきっとあるんですよね。何かそんなふうなことも含んで、ギャラリートークでしていただけるとすごく楽しそうだなと。ちょっと考古学っぽくという意見です。何かお答えしていただくわけじゃなくて。

多分、おもしろそうな感じというのはこういうところですよね。仕事の内容がつらいとかそういうのじゃなくて、興味に向かってこう行くというところに、それが企画展とかに生きていくというのが、リアルに見えるところがすごくこの館のいいところだと思うので。あと、気になるのが、チラシのすき間があくのは折り間違いなんですか。

【中村学芸員】　すき間があいてしまうのは、もう印刷の折り加工上、仕方なくて、中２ミリぐらいはあいてしまうと言われていたので、ちょっと文字が透けてしまいます。

【鉄矢会長】　折り直したらきれいだなと思って。それは、こっちをつくっていた正木研のほうに突っ込んだほうがいいですね。そのぐらい、最後まで理解していないでつくるのはだめですよと。今度、こういうことをやるときは、最初から実験して、折り機のそういう能力を知ってからやってくれないと困りますよと言っておかないと。ちょっともったいないですよね。

【中村学芸員】　そうですね。

【鉄矢会長】　このすき間が。でも、何か、ここはチラリズムにもなっていないですよね。はい、以上です。

では、３番です。新収蔵作品について。資料は、４です。

【荒木学芸員】　今年度に入りましてこの春に、まず電話で中村研一の作品を寄贈したいということで連絡がありました。その後、まず写真を見せていただき、都内にあった作品でしたので、実際に見に行ったところ、中村研一のかなり珍しいタイプの戦中時代の作品であるということで、当館に寄贈していただこうということになりました。８月２９日に今年度第１回の収集評価委員会を開催し、その審議の結果、このたび、以下の作品が収蔵されることになりました。

作品名は、特についていなかったのですが、表の書き込みなどから「明治神宮」というタイトルをつけています。この右の写真にちょっと書き込みの部分をクローズアップしたんですけど、「明治神宮」「昭南島（シンガポール）陥落朝」「中村研一写」と書いてありまして、１９４２年２月のシンガポール陥落の後の、国内各地でいろいろ祝賀ムードだった

時期の、明治神宮の朝の風景を描いた作品です。ただ、当時の新聞記事を読むと、明治神宮はすごく参拝者で埋まっていてというような記述があったにもかかわらず、このように人が左側のほうにちょっと固まっていて、真ん中のほうにも二人、ぽつぽつと人がいるだけという、戦中期の、戦争にかかわるテーマでありながらも、いわゆる戦争画らしくないという、ちょっと変わった作品です。

この作品は、２５日からの所蔵作品展で初公開する予定です。

【鉄矢会長】　これ、雪の日なんですか。

【荒木学芸員】　そうです。２月の多分１７日ぐらいと思われて、新聞記事でも「白雪きらめく明治神宮」というふうに書かれていたので、一致していると。

【鉄矢会長】　これ、明治神宮の入り口ですか。入り口の広場、この位置はどの辺なんでしょうね。何かわかりそうな感じがしますね。

ありがとうございました。

【薩摩学芸顧問】　ちょっと補足させていただきたいんですけれども。そんな大きな美術館ではないといっても、やはり地道に活動していると、こういう成果が出てくるのかなということで、これは一つ、今年の活動の成果であると思っております。ご承知のように、中村研一は代々木のアトリエが戦災で焼けまして、戦前の作品はほとんど失っております。そういう中でこういうものが、大きさからいっても、７１センチ掛ける９０センチというものがやはり出てくるんだなと改めて思ったということと、今までの中村研一の、戦前の作品はあまりわからないとはいえ、写真その他いろいろなところから類推する画業の中に位置づけると、極めて特殊な作品であると。戦争画を随分描いた中村研一なんですけれども、シンガポール陥落の朝の明治神宮を描きながらこういう、実質的には雪景色の風景画になっていると。中村研一がこの手の絵を、さらにあったのかどうか、そういうことも含めてこれからいい資料になっていくのかなと思っております。

それもありますので、いただいてきて、この１点のためにすぐ収集委員会のほう、予算の問題あるんですけれども、すぐ開きまして、もう今年の次の所蔵作品展で公開したいということです。これも、数年前にたまたま、あるところから「シンガポールへの道」という、シンガポールへ進軍する兵隊が、喉が渇いて泥水をすすっているという作品がありまして、その二つとの関連からいってもなかなかおもしろいものであるということで、これは一つの成果であろうと私は考えています。

【山村委員】　ちなみに、これは来歴とか、何かそういうのはわかるんですか。

【荒木学芸員】　所蔵されていた方によると、その方のお父様がかつて海軍主計にいて、軍艦に飾られていた絵であったというふうに聞いています。ただ、その船が何かとかいったことはまだわかっていません。ただ、中村研一が軍艦を飾るための絵を描いていたという事実はありまして、特に戦艦大和の士官室に飾られた絵がやはり近年発見されて、今、呉の大和ミュージアムに所蔵されています。そういった例はあるので、その可能性はあると思っております。

【薩摩学芸顧問】　お父さんは主計中尉だね。だから、多分、主計中尉の人が何らかの機に持っておりちゃったんでしょうね。

【荒木学芸員】　戦艦では、最後に積んでいた物を引き揚げちゃうという事例があるみたいですね。

【薩摩学芸顧問】　ええ。そういうことはあるので、一番いい例が、戦艦大和と一緒に沖縄に向かった駆逐艦あたりからは、それ以前に余計な物を全部おろしていますのでね。そういう中で多分、おろしたものなんだろうと思いますけどね。

【鉄矢会長】　あれですか。船に飾る場合の裏側は何か、揺れないようにやっていたとかいう、何か、呉の大和に載ってたというのは多分、船の絵って、これは勝手な想像ですよ、普通の絵の描き方じゃないはずだと思っているんですよ。

【薩摩学芸顧問】　なるほど、ちょっともう１回、そういう目で見てみます。

【鉄矢会長】　そういう目でちょっと後ろを見たいなと思って。揺れないようにつけているのかなと。

【薩摩学芸顧問】　大和ミュージアムに入っているのって、どういう絵？

【荒木学芸員】　「みほの関」です。今回、当館に入った作品よりも一回り小さい、小ぶりの風景画です。

【薩摩学芸顧問】　やっぱりね。船に飾るの、こういう内地の風景画を飾るんだと思うんです。

【山村委員】　逆ですよね。展覧会なんかでよく、中村研一は戦闘場面とか、飛行機が落ちているところだとか、そういうのは内地の人間が見て、ああ、戦争はこういうふうにやっているんだろうと思うんだけど、これは逆に、戦争に行っている人間が内地を、ああ、日本はいいところだなとかって思いながら。

【薩摩学芸顧問】　多分、そういうことになっている。

【山村委員】　だから、逆にこういう、何ていうかな、あんまり派手派手しくなくて、

雪景色がね。懐かしい、早く帰りたいとか思うんだろうね。

【薩摩学芸顧問】　　そういう意味でも、貴重なものだと思います。これ、場所を特定できるんじゃないかな。そんなに変わってないと思う。行ってみたら。

【鉄矢会長】　　この何本かの木が、何年前でどのぐらいの大きさになるかというのをちょっとやるだけでも。ありがとうございます。その場面で、こういう楽しいギャラリートークもできるといいですね。

　では、２７年度予算要求について。よろしくお願いします。

【平岡委員（館長）】　　では、ちょっと、委員ではありますけれども、私のほうから軽くご説明をさせていただきたいと思います。来年度予算ということなのですが、御多分に漏れず、どこの市役所も来年度に向けて考え方というのを役所の中で示した上で、各課予算に対して対応していくということになるので、ちょっとつまらない話のほうは私のほうでさせていただきたいと思います。

　当市の来年度に向けてですけれども、やはり、かなり厳しいという説明を延々、担当として受けてきたところでありまして、基本的には、現状の予算の維持ないし減が前提となるということをかなり強く言われてきています。美術館の予算としても、やはり消耗品であるとか、印刷製本費、また、委託料については現状維持または減。それから、特に我々として一番頭が痛いのは光熱水費でありまして、これについては、どこも同じだと思うんですけれども、増えている状況はありつつも、それに見合ったものを当初からいただくことはなかなか難しいというような話を聞いています。

　ですので、そういったことを踏まえて、今回、実は予算の内部の手続きが１１月初旬までという状況なものですから、まだこちらとして出すものが固まっていないので、今回はあくまでも特徴的な部分だけ、概要だけ、資料として示させていただきました。それ以外のところはちょっと事務局のほうで簡単にお願いします。

【事務局（吉川）】　　今、館長のほうからお話がありましたように、まだちょっと確定の金額が固まってはいないのですが、２６年度の予算額に対して、今年と去年ですが、地域創造からの助成金をもらっておりましたので、その部分が減額になりますので、一番右端の部分が２７年度の予算要求ベースになるだろうということを予想しております。この中で、どこを倹約して、どこにまた予算を持っていくのかというような話はこれから詰めていかなければいけないなと思いますが、この金額より増えるということは多分なかろうと思っております。

今、この要求ベースの中でさらに消耗品費とか光熱水費等を編成方針に沿った割合である程度減額して要求していかないと、予算が多分つかないでしょうと思っています。特に、来年は地域創造のような大きな助成はついていないんですけれども、今、来年度やります企画展１本を、芸術文化振興基金助成金及び一般財団法人自治総合センターの「地域の芸術環境づくり助成事業」などに向けて申請を行っています。ただ、これは今後については確約されたものではないですし、今、どこの自治体もものすごく財政が厳しいので、助成金の獲得が非常に難しくなっております。当市の中で私が一番助成金を獲得していると思うのですけれども、私がやってももうちょっと難しいかなという実感ですので、頑張りますが、なかなか。また、助成金を取れたとしても金額の割合が、すごく少なくなっています。去年、芸術文化振興基金を交流センターの事業で１個取っているのですけれども、４００万円の事業に対して８０万円の助成だったと言っていましたので。うちが以前に結城座展で取ったときは、２００万円に対して９０万円ぐらい助成されたのですけれども、やはり競争率が非常に高いということもありますが、取れる助成金は全て手を挙げて、申請をしていこうかと思っています。

下にあります、その２点なのですが、額縁作製委託というものなのですが、３年前に寄附していただいた、かなり大きな絵が、肖像画があるのですが、額縁が大変傷んでおりまして、それを直さないことには公開できないということで、毎年額縁の予算を要求はしているんですけれども、なかなかつけてもらえないので。でも、やはり美術館にとって額縁は大変貴重なものですので、粘り強くこれを要求していこうというところです。

あと、今回寄附になった絵も、収集評価委員会で、少し修復が必要ではないかという意見をいただいておりますので、今までは素描などのマット加工をする予算を取っていたんですけれども、学芸員のほうから、素描のほうのマット加工はある程度めどがついてきたので、今後、油彩の作品の修復であるとか、この間、私が片づけ中に見つけた、絹に戦闘機の絵が描いてある作品の裏打ちをするであるとか、そういうものの、作品の修復費という形で名称を変更して、マット加工料も含めて要求するような形に少しずつシフトチェンジしていこうかなと思っています。

限りある財源の中でうまくそれを使う形を考えていかなければいけないと思っております。なかなか芸術文化の施策はご飯が食べられない話ではないので、どこも自治体は結構苦労はしていると思うんですけれども、今年度はかなり業績というんですか、入館者数も増えておりますので、ぜひその辺のところは考えていきたいなと思っております。

あと、広報をすごくしていると、やはり人が入るというのは確かにそうなので、今回、やはり助成金で潤沢に広報費が使えたというところが非常に、入館者数増に対しても如実にその成果があらわれていると思っています。そのあたりを踏まえて、広報費に対しても、頑張ってはいきますけれども、今年の成果がありますので、その数値をもとに、ある程度広報費を出さないと成果が上がらないという説明はしていこうかと思っておりますが、なかなか難しいとは思います。

以上です。頑張ります。

【鉄矢会長】　ご質問等ありましたら。

せっかく市の財政を補助するように助成金をいっぱい取ってきたのに、それがなくなると、少しぐらい頑張ったね金を出してくれてもいいぐらいなのに、ただただ取られちゃうだけだ。

【事務局（吉川）】　あまり評価されていないみたいですね。

【鉄矢会長】　持ってきたことを。

【事務局（吉川）】　はい。持ってきたことを。今、１０分の１０の助成金というのは、なかなかないので。結局、市の持ち出しがやはりあるじゃないですか。

【鉄矢会長】　はい。

【事務局（吉川）】　なので、あまり評価されていない。

【山村委員】　費用は助成金で持ってきて、歳入は市に入るという……。これは考慮してもらいたいですね。

【平岡委員（館長）】　もともとやはり、何というんですかね、採算性というところを前提に考えるのではなくて、そうではないところを大きく支援として置くべきものではあったと思うんですけど、また今回、さまざまな要因が重なって、今年度はうちとしてはかなり、ものすごく収支がいい状態になるだろうと思われますので、そこがどういう方向で、庁内でも評価されていくのかというのがすごく課題だなと思っていて、よくやったと言われるのか、去年はできたのになぜ今年はできないと言われるのか、そういうことも含めて、こちらとしても、何とかうまく現状維持ぐらいはやっていきたいなと担当としては思っております。

【鉄矢会長】　はい、わかりました。ほかにご質問等ありますか。

では、なければ、その他でよろしいですか。

【平岡委員（館長）】　では、私のほうから、済みません。情報提供です。このイベント

を主としてやっている一般社団法人武蔵野コッツウォルズというところがあるんですけれども、１年ほど前に、小金井を含めたこの近辺をある程度のエリアとして見立てて、ウォーキングやサイクリングを中心とした、こういうような「森の地図」をつくってスタンプラリーというイベントを手がけていらっしゃる団体さんがいます。そちらの方々が今回、第５回ということでやられるのですが、今回ははけの森美術館の紹介だけ、入れてはいただけたのですが。

【事務局（吉川）】　毎回コースが変わるんですね。２回目の時はコースに入ったんですけれども、やはりいろいろなところを紹介したいということで、全部変わります。いつも同じコースだと、確かにスタンプラリーをする方が飽きてしまいますので。

【平岡委員（館長）】　今回は大分、府中市さんのほうに取られてしまったようなルートになっています。その前は、三鷹市さんに取られてしまったようなルートになっていたりしていて。

【事務局（吉川）】　ただ、そういうルートの近くのところの紹介には入れていただいています。

【平岡委員（館長）】　府中市は、市政６０周年のイベントもあったりして、今回はそちらのほうがちょっと取られちゃったのかなと思ったりもしているんですけど、定期的にまたうちのほうにも「入れてくださいね」ということで、これを持ってくるたびにお願いはしています。そういう、比較的今後もおつき合いがありそうなところも含めて、皆様のほうにもちょっと情報提供をさせていただければと思って、今日、資料に入れましたので、ご参考までにということでよろしくお願いいたします。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

その他。意見交換等。学芸大学の１年生が美術館でボランティアみたいな、何か学芸員になりたいんだけど、やってみたいというのが出てきていますので、ちょっと何かそういうことができるようなルートを探していただけると大変ありがたいと思っています。

【平岡委員（館長）】　役所のほうでも、インターンシップのような制度もあるようですので、そういったところとうまくフィットできるかどうかも含めて、ちょっと宿題とさせていただければと思います。

【鉄矢会長】　よろしくお願いいたします。

【鉄矢会長】　では、次回の日程。１月の末か、２月の頭になっておりますね。

【平岡委員（館長）】　２月３日火曜日、６時半からを予定という形でよろしくお願いし

ます。

【鉄矢会長】　　はい、お願いします。　これで第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

――　了　――